

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:5.

下肢閉塞性動脈硬化症バイパス術後の二人暮らし高齢者と配偶者の在宅での日常生活体験

植山 さゆり, 大坪 智美, 服部 ユカリ

下肢閉塞性動脈硬化症バイパス術後の二人暮らし高齢者と配偶者の在宅での日常生活体験

旭川医科大学 看護部 ○植山さゆり

旭川医科大学医学部看護学科¹⁾

大坪智美¹⁾ 服部ユカリ¹⁾

【目的】 下肢閉塞性動脈硬化症のバイパス手術後の高齢者の生活・自己健康管理支援に活かすため、高齢夫婦二人暮らしの日常生活体験を明らかにする。

【方法】 対象選定：下肢閉塞性動脈硬化症のバイパス手術後1カ月以上在宅生活している65歳以上の夫婦二人暮らしの患者と配偶者。データ収集方法：自宅での夫婦一緒の半構成的面接。分析方法：質的統合法（KJ法）で個別分析後、総合分析。倫理的配慮：所属大学の倫理審査委員会の承認を受け、研究目的、任意性、匿名性等について文書と口頭で説明し同意を得た。

【結果】 研究協力者は男性患者3名、妻3名。年齢は60歳代後半～70歳代。患者は「高齢ゆえに重視する公的制度と近隣コミュニティ」を基盤に、「手術後部分的に残る下肢症状と、複数疾患を抱え一部生活動作の制限を自分なりに補い生活」し「手術前の下肢症状、歩行困難が改善し手術後拡大した日常生活」を送る、と同時に「夫婦互いに干渉しないように日課、娯楽を楽しむ」「自然で自由な暮らし」を送っている。また「配偶者への肯定的な思い・体調の心配の一方、自分の行動を認めてくれない煩わしさ」という「配偶者への多面的な感情」を抱いている。これらは「自分が必要と思えることは行い工夫するが、できないことは行わない考えのもと病気の悪化を予防」する「自己決定による対処行動」に支えられている。その中で「今後の暮らしへの現実的な検討をしているが、なお残る車での通院、生活への心配」という「この先への不安」がある。配偶者は「生活環境を変更、退職を契機にほぼ自宅で生活」という「老後のライフスタイルの変化」と同時に「病気への自分なりの管理と対処」する生活が基盤になっている。これらを基盤に「患者のサポートと妻役割の遂行」と共に「手術後の患者の生活への肯定的な思いと助言を嫌がる患者への不満」という「患者の行動への相反する思い」がある。同時に「生活の楽しみと張り合い」を持っている。また「この先の不安」を抱えている反面「この先の自由な暮らしへの思い」を持っている。

【考察】 患者は手術効果により辛い下肢症状、歩行困難が改善し日常生活はほぼ自立したが、生活上必要と感じ、行える自己管理でなければ継続されないことが明らかになった。また、今後の通院手段の確保など成人とは異なる、この先の生活への不安な思いを抱いている高齢者の心境を念頭に置き支援していくことが重要である。